

平成23年度

厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金報告書

民族誌学的研究手法を用いた厚岸ニシンの生態環境変化の考察

インディアナ大学大学院人類学科
濱田信吾

Reboxki

背景と目的

- ニシン来遊の途絶

ニシンの来遊は変動がありながらも、減少していき1970年に途絶した。しかし、ニシン来遊の途絶の誘因は諸説あり、まだ不明。

- なぜニシンは「幻の魚」となったのか？
- ニシンが豊富だった頃と現在の厚岸湖湾の状況はどれだけ異なるのか？

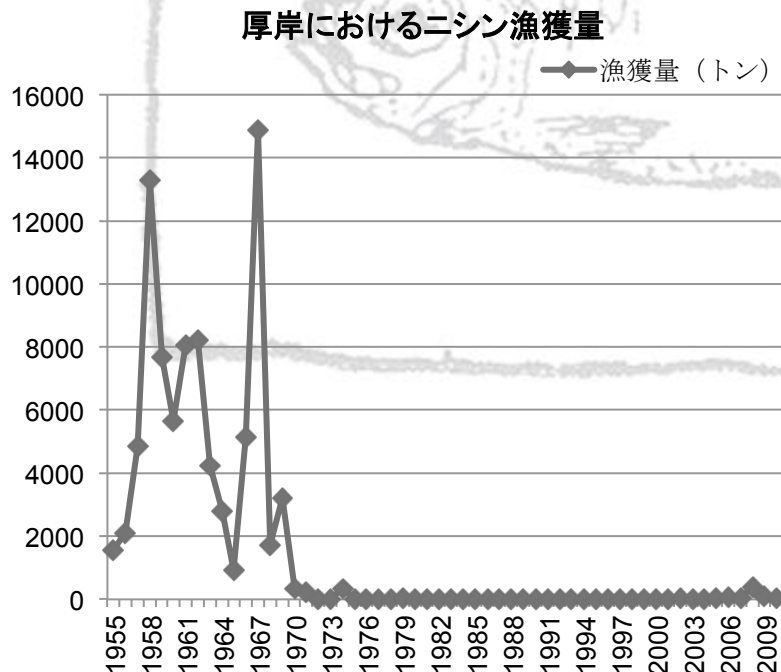


写真: 稲葉憲三氏撮影・提供 (宮川佳治氏所蔵)

研究手法：民族誌学的アプローチ

物質としての考古学的証拠が残りにくい沿岸海洋区域では、その地に長く居住する地元の方々が持つ環境知識が貴重な研究材料で、資源管理計画へ応用することができる可能性がある。

- 文献資料調査
 - － 既存の文字化された資料から、生態環境の歴史的変化のてがかりを探る
 - 聞き取り調査
 - － 厚岸湖湾を見て育った地元の方々からニシンが豊富であった頃の生態環境について伺う
 - 参与観察
 - － 実際にニシン漁に同伴、体験することによって、ニシンの生態環境に関する資料を収集する
- “ローカルな”視点と経験から、厚岸ニシンの生態環境の変遷について考察する

生態環境変化： 流氷とニシン来遊の関係



- 「流氷がきて、流氷がこう接岸して、ぽろぽろ海面が空くようになったらその下にニシンがいた。だから、俺ら気の早いほうは、こういう氷をツルハシで割ったりなんだりして、船を下ろした。で、その中でもって、ニシンを獲る」(E氏)
- 「やはり氷を張ると、ニシンはよってくるね。氷の下つつうのは、プランクトンがいるのかね。あの千島氷が入ってくる頃、必ずニシンもひっついてくるよ。それはやっぱプランクトンが多いんだ。プランクトンが溜まる。それをニシンがついてくるから。沖のほうから入ってくるつったら、かなりニシン入ってくる」(F氏)
- 「青い氷な。あれは下が白くねえんだ。してな、栄養素をいっぱい持ってくる」(I氏)

→流氷とニシンの餌となる動物プランクトンの関係？

- 流氷は湾内に繁茂する海藻を引き抜いていた
→流氷とニシンの産卵場となる藻場群生地との関係？

写真：昭和30～40年頃
稲葉憲三氏撮影・提供（宮川佳治氏所蔵）

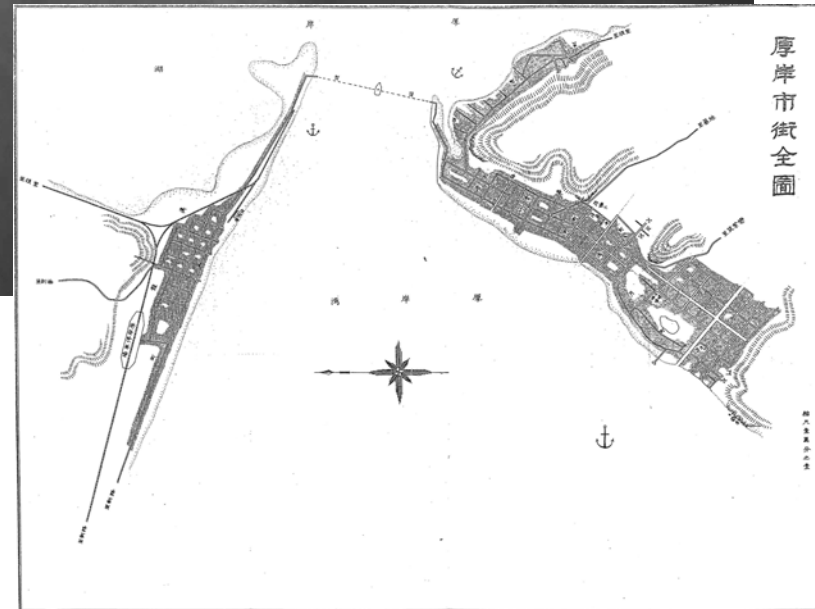
生態環境変化： 港湾整備と産卵藻場の 関係

「前浜の藻がなくなった。やっぱニシンがいた頃は、ここら(湾月からバラサン、愛冠にかけて)の前浜に藻がびっしりあった」(I氏)

「ニシンが獲れなくなったのは昭和45年、で終りなのさ。それが最後なのさ。ま、まだまだ、地域にはまだ来るべってような思いもある。でもやっぱり、これだけ海を変えちゃって...。言うなれば、根付け漁業なのさ、ニシンの場合は。藻場で産卵してその土地に戻ってくるっていうのがひとつ。その産卵する場所がなくなっちゃった。その護岸整備で」(H氏)

→護岸整備や港湾開発で有益がある一方、ニシンの産卵場となる沿岸部の藻場が喪失または減少した？

上図：2005年厚岸町(国土地理院)
下図：大正6年厚岸市街全図(新厚岸町史より)
- 海岸線の変化が顕著に見える



生態環境変化： 漁業技術革新と乱獲の関係



写真：昭和42年2月ニシン水揚げの風景
稲葉憲三氏撮影・提供(宮川佳治氏所蔵)

冲刺し網、沿岸刺し網、建網など、ことなる漁法を用いる漁業者間での競争の激化？

- “獲れすぎて困る”(道新 昭和33年3月3日)
- “置き場に困る”(道新 昭和42年3月9日)
- “漁民もたまげるバカ景気”(道新 昭和42年3月13日)
- 「とにかく、いるだけ獲った」(E氏)
- 「ちょっと郡来のとこずれてくれば底が見えてくるわけだ。すごいもんだもんな、ニシンな。こんなもう、先に向かって、日本人っての欲だな、魚をぐるっとまわして、獲る気になってよ。網刺すんだ」(L氏)
- 「(技術的に)いいものが出来過ぎた」(K氏)
→動力船やその他漁業操業技術の革新、そして改良された建網などにより「一網打尽」のニシン漁が展開

まとめ



写真：昭和42年2月のニシン漁
稲葉憲三氏撮影・提供（宮川佳治氏所蔵）

- ニシン漁が発展する一方で、漁獲量が激しく変動しながらも減少した傾向が改めて確認できた。
- ニシンが厚岸湖湾に多く来遊していた頃の沿岸海洋生態環境や前浜の様子が現在のそれと大きく異なる点について情報を収集することができた。
- 聞き取り調査で特にあがったのは、港湾開発と流氷の生態系機能、そして乱獲であった。
- 昭和中期のニシン漁については、今でも多くの方が鮮明に覚えていた。それゆえ、今後聞き取り調査や体系的な質的研究を継続することでさらなる環境知識の蓄積が期待される。

→歴史的に見ると、現在のニシン資源量はとても少ない。この少ない資源量のニシンの来遊が、今後「当たり前」と認識されるようなことは、沿岸海洋生態系の回復や、保全への取り組みの発展のためにも避けなければならない。そのためには、元・年配漁業者や、長く厚岸町に居住されている方々が持つ海に関する環境知識を、次の世代と共有していく必要がある。

今後の課題



- 本研究を振り返ると、聞き取り調査の回数や参加者のサンプリングに偏りがった。そのため、収集した環境に関する知識が断片的なものとなった。
- 年配漁業者を対象にした情報収集は一定の成果があったが、高齢者、特に80代を超える方から女性からの聞き取り調査はあまり行なえなかった。

=研究参加のお願い=

道東におけるニシン豊漁期頃(昭和45年頃から前)に関する情報を引き続き集めております。当時の様子をお話して頂ける方、当時の写真などお持ちの方は、ご連絡ください。ご協力お願い致します。

今回の調査で得られた情報を下に、今後は形式的な聞き取り調査など含めた、更に体系的な研究調査を進めていきたい。

濱田信吾

080-6087-5769, hamadas@indiana.edu